

SKY-LINE

Vol. 2 No. 1



横浜国大ワンダーフォーゲル部

とりすましたコーヒー屋で
ベイトオベンとやらを聞かされたつて
赤いポストの向こうに
政治演説があるようなものだ——

デパートのテラスで
チュニツクの襟を立てることも
或はアメリカンブリアンとかいうのを、フンブンさせて
大江橋を渡ることも
お前の虚偽のように虚しい……

山があつて
それからあとは
なにも無いのだ——



ワールドスポーツ

TEL. ⑧ 5058

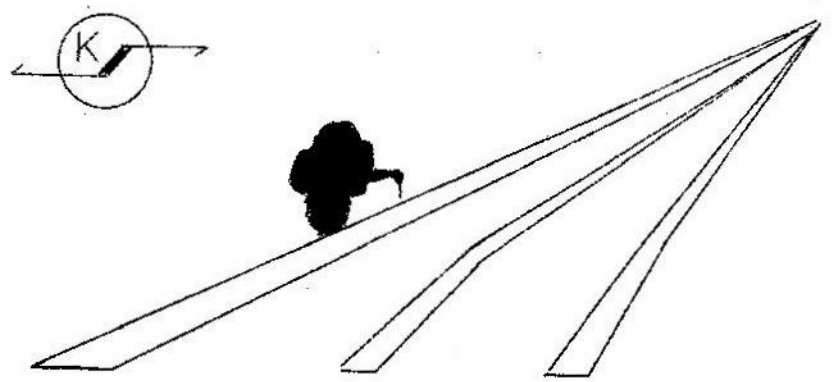
横浜市中区福富町東通38(ニ楽ビル)

SKYLINE

Vol.2No.1

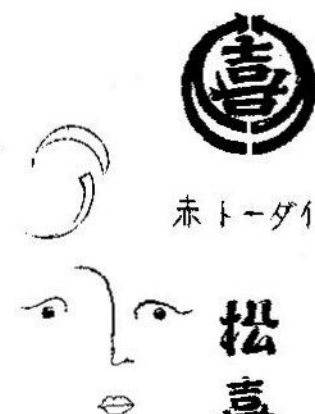


YNU WV



カマクラスポーツ

鎌倉八幡通り TEL. 4151



お買物は
松喜屋
アキトダイ

目次

ワンゲルは如何にあるべきか	嘉納秀明	4
源次郎沢からモミソ沢	望月元雄	8
奥日光キャンプ記	岩上克尙 他六名	10
奥秩父あるき集		
乾徳、黒金登山記	岩村美智子	14
残雪の奥秩父	松本正雄	17
積雪の奥秩父	嘉納秀明	19
連載読物 「ウウーンもつとラ……」	佐藤文雄	24

横浜市南区浦舟町1の1
精松古流
松鳳斎 石井宗風
詳細問合せは ワンゲル部まで

伊豆の海岸線	鈴木直美	25
烏帽子―槍縦走記	河野 哲	28
北海道てんとあるき	松本正雄	33
金もうけの話	佐藤文雄	39
スキー合宿報告	編集部	41
昨年度の部活動		7
三十四年度の人事		42
編集後記		44
表紙		1

TEL (3) 4723
弘明堂書店
弘明寺観音通入口

ワングエルは如何にあるべきか

嘉納秀明

本年初め一年の部員諸君に「ワングエル一年の感想」を書いてもらつた。これが沢山集まつた。私はこの沢山の意見を綜合しながら私としての部に対する見解を述べたいと思う。まず大部分が一致して云つてゐる事は我が部の持つ雰囲気の明るさ健康さである。学部の所在が遠く為に上級生との接触が多少思うに任せないにしても良く纏つてゐると云うのである。又それにつけ加えて山行き野行きして自然に接することの楽しさ喜びしさを書いてきた人も多い。つまり我が部は気の置けない連中が集つていつも明かで楽しい。そんな連中が揃つて美しい山野を跋渉しようと云うのだから悪い事は無いに決つてゐる。前提条件は揃つてゐると云うのである。しかし次に楽しい旅

らと思う。この事についてはアンケートの中でも多数の人の云つてゐる如であるが山の知識として気象、地図の読み方を研究してインテリジェントな登山をしようとか更に具体的には学校の裏で良いからテントを張つて合宿し訓練すべきだと云う意見がある。どれも当り前なら部で既に実行してゐなければならぬ事である。山に行く時、参加部員は各自地図を持つてコースを書き入れて置く事位しなくては萬一の場合危険とさえ云えるのに実行されてゐる様には思はれないし、昨夏八ヶ岳に行つた時は主として二年生は七、八貫も背負つてゐるのに三貫目位のサブザツクの部員も居たと聞くが、こんな不均衡を無くし、自分の寝る道具、食糧は自分で背負うと云う気風を作らねばならぬ。又テント生活も長い旅だつたり、きつい旅だつたりすると互に利己的になり部室で良い人でも山ではイヤな奴になつてしまひ、些細な事で感情の綻が生ずる機になるのだから強い責任感を養うために

をしやうと考えれば我々は、多分楽しくは無いらう「下積みの活動」を避ける事は出来なくなる。今までの部活動はともするとこの一番大切な要素が疎せられていたと私は思う。我々の頭の中は遠景のすばらしい岩山の頂上に立つ事や、テント生活の楽しい団居の想像で一杯だつたのではなかつたか。我々は頂上に立つ迄の幾多の危険やテント生活の中で互に疲れ自分の事をするだけで精一杯の時、しかも生活を楽しくする努力を忘れたのではなかつたか。

我々は楽しい旅のための「下積みの活動」を再認識し、それに参加する様にせねばならぬ。そうする事に依つて創設後僅かにして本学有数の大きな部となつた我が部を名実共に充実した立派な部とすることが出来

も団体行動を立派にするためにも浅い山でのテント合宿や多少の「ぼつか練習」しなればならぬのは当然である。昨年度はそれをせずに一挙に奥秩父や八ヶ岳にゆき雨の為敗退したのは正に反省すべき事と考える。更に云うならば、我が部には山に行きつばなしと云う悪い習慣がついてきた様だ。一体山に行つた後、個人的な場合はともかくとして、部として大規模に計画された山行の後、その都度開かれるべき反省会が余りなされてゐない。もつとひどいと思つては山行の時間的記録の無いものが本誌の紀行文の中にも幾つかあつた。苟も部活動として行つておきながら反省会もせず記録もなつたとして、どんなに旅先でうまくいつても、全体としては大して意味のないものである。

今迄、部の活動面の事を述べたのであるが、部の組織面でも問題となるべき事が多いと思つた。まず第一に創設以来懸案の部の性格が未だ定まらぬ為、アンケートの中

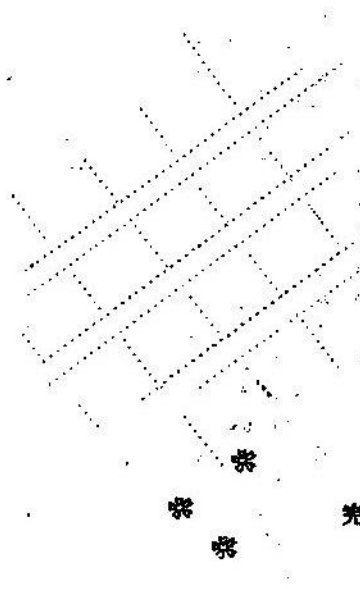
でも、もつと山岳派になつて欲しいとか、全く乗り物を使わず足だけで目的地に行きたいとか、ヴァガボダイズしたいとか「山もよいがヒッチヘイク等もやつてみたい。運転手とダベリたい。洗濯した下着を歩みながら乾してみたい。山家で親希達やむくな娘達と炉を囲んでくつろいでみたい」などと云う意見もある。ワングル活動がこの語源から離れてきている現在、他大学ワングルでもこの様に山岳派、遺蓋派との二派はあつても山岳派がその主流派となつていゝのは事実の概だ。しかし私としてはこの阿派があつて然るべきであり、部の計画が一方に偏り過ぎるのは考えものだと思つてゐる。その為には総会などの席でいろいろの意見の人が活潑に発言する様願いたいものと思ふ。

第二に現在部則の無い事で部の行事や組織が体系化されない事に関する意見も多かったが部員数が増えてゆく我が部では不文律では律しきれないと思ふ。今迄総会が山

学部が離れている本学では部の統一も不本意な点が多いが本年は立野の清水ヶ丘移行もあり、部員の層も広く深くもなつてゆくものだから、大いに張り切つて活動したいものである。

以上アンケートの解答意見をもとに部に対する批判的見解を述べたのは、又すべて、我が部創設に参加したものとしての自己反省でもある。

この反省の中から新しい部の発展への意志が生じ、部の前途を拡大なものとする様に折つて止まない。



行きの相談のついでに行われる嫌いがあり、(従つて一年と一緒に山にいったことの無い私など一年とコンパで一緒になる位で、共に議論した事がなかつた)この様な基本的問題について、討論する時間が少なすぎたと思われる。

部の統一を期するためにも総会は独立に開くべきものである。その中から部則が出来よい伝統の土台が出来れば良いものであると私は考へる。

歴史の浅い部のため装備が少ないと云う意見が出て来るが、資金源が部費以外に一寸と無い現在、増えようとは努力しているのであるが、仕方ない事かもしれない。それでいきおい個人装備にすべて頼ることになり、入部の時の考へ以上に金がかかる部であると云う意見にもなつて来るのであるが、或る程度の装備は不可欠であるから、これも正面からの解決策はないが、二年生の方は大抵アルバイト等して何とか工面しているのが現状だと思ふ。

昨年度ワングル活動記録

- 四月 伊豆半島ワングリング
 - 五月 奥秩父主脈縦走
丹沢新入生歓迎登山
 - 六月 丹沢沢のぼり
 - 七月 八ヶ岳合宿
 - 八月 北アルプス裏銀座
東北旅行
日光ワングリング
 - 十月 八ヶ岳
大学祭参加
 - 十一月 乾徳黒金登山
 - 一月 スキー研修会
 - 三月 スキー合宿
- 奥秩父主脈縦走

源次郎沢からモミソ沢

望月元雄

源次郎沢は水無川の本谷から分れた一つの沢であるが、丹沢山塊中割合に平易な沢であり、一般的で登山者も多い。我々がこの沢を試みたのは六月のことであり、その次第を綴つて見よう。

一行は吉田、田上、松本、河野、小生の五名で、その内沢登りの経験者は、吉田、田上小生の三名で、それも丹沢の勘七を唯一度やつたことがあると云ういたつておそまつなパーティーであつた。しかし、当ワングルの、敢て危険を冒さないと云う建前から大きな壁はまくという事で出かけた。計画では源次郎をつめて塔までのぼり、それから大倉尾根を下るはずであつた。しかし、案内書と地図だけを頼りに沢の技術も未熟な者ばかりが行くことにはやゝ不安があつたし、研究も不充分であつた。

フオールまでは皆二メートルから五メートルぐらいしかなく、階段をのぼるような気持ちでのぼることが出来た。第五フオールにつくと、登山者が一ぱいで手間どつていた。ここは二又に分かれていて、左手はガレ場になつており、右手が滝で約十メートルばかりある。最後の夕源次郎では最大の壁である。ルートは壁の左側にあるが、いつまでたつてももちがあかず、待っている間に左のガレ場から頭ぐらゐの落石があり、危いので右側の壁をのぼることにする。二メートルほど直登し左にすこしトラバースしながらのぼり、そのまゝ上にのぼることが出来そうなので、まず小生を試みた。ホルドもステツプも適当にあるので、さほど困難もなく上についた。松本が続いて上り、三人目に河野が試みたが、壁の途中でホルド見つかからず、進退きわまつてしまつた。そのとき左のルートを降りて来た者が二メートルほどの所から足をすべらしておちたので、上と下からホルドとステツプ

九時半に沢沢に集合し、大倉から水無川に入り、平坦な道をうんざりするほど歩いて、十一時前にモミソ沢の合流についた。この日は日曜日なので、登山者が多く、モミソ沢の合流の壁ではロツククライミングの練習をしていた。ここで中食を取つて、登山靴とワラジにはきかえた。ここからいよいよ川の中を歩くのである。水無川をすこしのぼると、源次郎の合流につき、本谷と分かれ、源次郎に入る。はじめのうちは唯水の中をジャブジャブ歩くだけだが、やがて第一フオールにつく、難なくこれを突破して第二、第三のあたりになると、先行のパーティーに追いついてしまい、長い行列となる。このあたりはもうほとんど水も枯れてしまつていて、この沢なら登山靴のままでも大して変りはない。この沢なら出来る。我々のペースは相当速かつたが、疲労などは全然ない。しかし、第四フオールでは人がつかえていて、待たなくてはならなくなり、時間がかかるようになった。第四

を指示して下におろし、三人は壁の横をまいてきたが、彼等の残念そうな顔といたつたらなかつた。二時近くなつていたので小休止することにし、靴にはきかえた。ガレ場をつめるともうあとは尾根道である。このガレ場は上にのぼるほど石が少なくなりなかなか登りにくい。尾根に人の姿が見え出すと皆元氣になり、意気揚ようようと登つた。花立まで来ると、あまり人が多いのにうんざりして、すぐ大倉を下ることになつた。が、面白くないので、モミソ沢を下ることにした。つるつるすべるところを木につかまりながら滑りながら下りる。両側の木がおいしげり、まるでトンネルを歩くような感じである。全然調べてないので、どの辺まで来たのか見当もつかない。ただがむしやらにおつこちで行つた。二つばかりちよつと大きな壁があつたが、苦もなく下り、出合まですぐについてしまつた。水が全然ないので靴をぬらさずにすんだ。あつてなく終つてしまつたので皆拍子抜けがして

、ぼやくことしきりであつた。時計を見る
と五時なのでちよつと休んで、うた声も元
気に帰路についた。後で考えてみてさほど
印象もないのは、この沢が容易である為で
なく、真けんだったたので、余裕がなかつた
からであらう。始めにしては成功と云える

岩上克尚

奥日光キャンプ記

岩上克尚

参加者

岩上克尚	加茂博夫	石井三男	磯村朝	宮内幹夫	吉野次郎
------	------	------	-----	------	------

並木に変わる前の、藪ブケ浜で水をくむ。
今日の目的地光徳沼キャンプ場もま近い
らしく、光徳沼に到着。沼といつても、大
きな水たまりと云う所か、しかし水々しい
草に乳牛の遊戯の様子、まったく絵からぬ
け出た様な感じであつた。

今日の収獲はテントの張り方を教つた事
なり。

十九日

明ければ十九日、村番の吹く雲の光に送
られ村を出る。村の裏手の道をジグザグに
登ると展望の全くない山王峠に着く。一服
して濁沼に下るナルホド水は濁れ全然ない
。草原にチヨウが舞う。そこから樹林を切
り開いた道に苔を踏んで切込、刈込湖に至る
刈込湖は美しい。某が「今日はここで泊しよう」と
云うのももつとも全くこんな所で月見をし
たらさぞ素晴らしいだらう。だがリーダーの
命令で残念ながら湯元え向う。倒木をくゞ
り右手下に 沼を過ぎるとブーンとイオウの
匂いが鼻をつく、湯元温泉が目下に開ける

十八日

車の中では降るかと思つた空も、日光駅
に降りた時には晴れた。高所にきたせい
かなを感じず。

ポコポコ、我々七人：横浜園大カツギ屋一
行は、中禅寺湖畔を行く、見覚えのある景
色だが、修学旅行で来た時とは気分がまる
つきり違う、この機な荷物をしよつて歩く
のが初めての僕には、好奇心で一杯なのだ。
赤い着物の色が目にとびこむ。サ、波がた
つ水面は歩に従つて色を変える。「二十分
歩き十分休もう。」一番大きいと思われる
荷をしよつたリーダーの通称岩ちゃんだ。
ブーツと自動車とすれ違つたにホコリの
洗札をあげせられる。「日本の道路は……。
。」という△○教授の言葉が思いだされた
。「オース」「オハヨース」行き交うハイ
カー達と挨拶を交すのも珍らしい。もう湖
の4分の1周はしたろうか、時計では十一
時三十分、昼メシを食う。ニギリ飯の梅干
しが歯にしみた。一時間休けいを取る。杉

ここも中禅寺に劣らぬ程賑やかなのでキャ
ンプ村を散逸して白根第二グレンデの白根
沢に程近い熊笹地帯にテントを張る。冷た
い沢で慣れた？手つきで食器を洗うのも楽
しい。Y氏の特製のカレイスープを食つた
後、町え下り二十円也の公衆浴場に無銭
入浴する。テントに濡り汗とイオウの匂い
のカクテルの中で毛布にくるまり雑談をす
る。

二十日

起床五時であつた。朝の食事もそこそこ
にさつそく白根登山の準備にとりかかつた
。サブザツタ二つに必要なものすべて入れ
て持つて行くことにした。残つた荷物は附
近の無人小屋の押入れの中に入れて七時に
湯本を白根山目指して出発した。熊笹のせ
まい道をしばらく行き道を左手の白根沢に
とつて急角度に登り始めた。道というはつ
きりしたものはなく、びしやびしやと水の流
れる岩の上をたど黙々と歩くのみだつた。
しばらく行つて休憩。沢の水のうまかつた

こと今思い出しても喉が痛る。ここから道を沢からはずして山道にとつた。再び急な道をぐんぐん上に行く。「天狗の休場」え着いたのが九時半。小憩の後、前白根えこの頃から黒い雲が始め風も出てきた。前白根え着いた時はあたりは暗く、風も強く、かなり寒かった。しかもすぐ手前に見える白根山は黒い厚い雲でおおわれていた。雨になることを恐れて白根はあきらめて、ここで写真は何枚か撮って五色山え向つた。五色山着は十時四十五分であつた。昼食にはまだ早かつたが持参のフランスパンにバターを付けて食べた。このパンは相当に固く水と一緒に飲み込む始末であつた。ここから南側に五色沼、東側に湯の湖が見えた。くやしいことに湯の湖には日光が降りそそいでいた。五色沼は水も少いようだし貧弱なものであつた。金精神え足をのげそうと思つたが時間的に無理であつたのでそのまま中層板を経て帰ることにした。

第四日目は昨夜からの雨が降りやまず予定を変更して終日小屋泊りと決定。山え来て朝からゴロ寝も又格別。朝飯抜き、昼フランスパン一個乾パン数個。午後雨が上る。ただちに飯を炊く。夕方SとGは沢の流れで沐浴。夜例によつて無料温泉。毛布に入つて最後の晩を皆で歌い明かす。

二十二日
五時半起床。きのうの雨もどこえやら、今日はまったくよい天気である。「男体山に登りたかつたな。」と一同空をみあげて無念そう。八時三十五分、一日半ごやつかいになつたスキー小屋に別れをつけ、緑色にすんだ湯湖を迂回して、右に折れ湯滝えおる。下りるに従つて、地面をとどろかさ音が下からわき上つてくる。下に降りきり、そこからみあげると、雨で水かさを増したためか、あふれるように水が落下し、思わすのみこまれるように感ずる。しげしげ見物。写真をとる。九時半滝を出発し、十時戦場ヶ原の入口にさしかかる。往きはバス

道路を歩いたが、今度は原の中を通る。原一面に草がおい茂り、ところどころに水たまりがあり、そこを丸木で組んだ細い道が多い。約一時間歩いて原が切れ、河原で昼食。十二時十五分電頭橋を通過、ゆく手に中層寺湖が広くみえた。中層寺には一時五十分につき、華敷の橋を中段から見、バスに乗り帰途についた。

オルゴールの店
熊谷商店
有隣堂うら

小倉アイスクリーム

あけぼの

鎌倉小町通り

8ミリ用品
カメラとシネ

合資会社 日光商会

鎌倉市小町六六
二ノ鳥居前

奥秩父あるき集

乾徳黒金登山記

岩村 美智子

学生寮で喫茶店「モンブラン」を開き忙がしい日々を送った後、工学部の人達はまだ工学部員があるので申し訳なかつたけれども、十月三十一日の夜行で奥秩父を訪れることにした。

参加人員 十六人
望月・吉田・小野・佐藤・磯崎・加藤
清水・吉野・岩上・斎藤・森山・大車
深谷・倉田・氏平・岩村

新宿発	二三・五分
塩山着	三・〇六
朝食	
乾徳登山口	六・一五
徳和	七・一五
銀晶水	七・五〇
錦晶水	八・二五
乾徳山	一〇・〇〇
昼食	
笠盛山	一一・〇〇
黒金山	一一・〇〇
大ダオ着	一三・三〇
徳和	一六・〇〇
塩山着	一七・二二

塩山の駅からタクシーに分乗して乾徳登山口に着いた頃は、街はまだぐつすり眠っていた。紅茶とスープを沸して朝食をする頃に、ようやく山の上から明けはじめた。六時十分山へ向かつて歩き始める。もうすつかり明かるくなつて、紅や黄の葉が様々な段階を見せて山を色どつていた。石床を流れる水も美しかった。

銀晶水で冷たい清水を飲む。汗げんだ体にひんやりと気持ちよかつた。すまきの生えるだけの禿山を、足もとを見つめて登つていく。霧が深い。錦晶水の小屋で又一休みする。後の人達も追いついたので水筒の水をかえて発つ。セーターから汗が湯気を上げていく。

この登りは苦しかった。人のことなどかまっていられない。一歩一歩足を動かすのがやつとで、止まったらそのまゝ動くのが嫌になりそうだった。変化のない所は本当に嫌だ。ようやく山道にはいる。落葉が道を敷きつめ、頂上近くなると大きな岩があ

ちこちにある、お腹が空いたのか力はいらず息切れがするばかり。「よいしょ」といちいち足を上げなくては岩を上がれなくなつた。さつき食べたパンなどどこかえいつてしまつたらしい。

しかし一息いれてふとふり向いて見た富士はなんと美しかったろう。雲海の上にそびえ、山で見た人しか知らない美しさである。が、危つかしい岩の上によりやく足を載せていると、つま先からなんとも言えない寒気がぞくぞくとして来て立つていられなくなつてしまつた。これでは岩登りなどとてもできまい。十メートルたらずの絶壁に登つて頂上だ。一人で登つてみせると力んだものの、鎖にぶら下つてしまふとどうしていゝかわからなくなつてしまつた。後の人達が一つ向うの岩の上で何やら言つてるが何もわからない。

ようやく手を引張つてもらつて頂上についた。乾徳山頂である。富士を真中に北アルプスと八ヶ岳が霞をいだいてはるかに見

える。今までの苦しさはすつかり忘れて「これだから山は止められない」と思うのがこの瞬間である。下りが又大変だった。コンパスも短かいし経験も浅い私は、足場の悪い岩を降りるのに、先へ降りた人の手の上にのる以外どうしようもなかつた。一人で降りられるように早くなりたいたいものだ。今度は黒金え行のわけである。木の下でたき火をして昼食にした。雨と火の粉をかぶつておにぎりを加げるのも、山ならではの味だ。黒金まではたいした所はなかつた。高いは一番高く、低いが一番低く行きたいのが人間の本能と言うが、黒金山頂の石の上に載つてあたりを見まわすと、大自然の大きさを感ずる。いくえにも重なつた山々に点々と黄葉した木が散らばっている。一日早く登つた田上さんと途中で会う約束だとか、男の人達が「タガミー」と山え呼びかけた。「オーイ」そんな返事がどこからか戻つてこないかと耳を澄ませたが、しんと静まりかえるだけだった。

た。それに、そんな足で川の上にも続くレールの上を渡るのはビクビクだった。やっぱり後の人達を待つべきだつたらうか。もし道にまよつたらかえつて迷惑をかけてしまふ。そんな事を考えしていると、「いた、いた」と声が出て後の人達が現われた。追いつかれた、と思ひながらほつとした。ようやく広い道へ出て先の人達に追いついた時は、皆涙眼する程待つたらしかつた

残雪の奥秩父



松本正雄

五月三日

梓山発九・一〇、西沢分岐一〇・三五、避難小屋一二・二五、峻線一六・二五、甲武信岳一六・五五

五月四日

甲武信岳六・二〇、富士見七・一五、東梓九・五五、國師岳一三・五〇、大弛小屋

黒金からは下りばかりだ。二年の女の人達は用があると紙切れに書いて先へ帰つてしまつた。大ダオで田上さんと会うそうだと「オーイ」という返事が戻つて来た。「あつ。いる」「いる」皆急に足どりが速くなり、駆け降りる人々もいた。ところがその枯草の中には誰もいなかった。では、あの返事は何だつたのだろうか？雨も降りだし、二時迄待つたが来ないので紙切れに伝言を残して下ることにした。

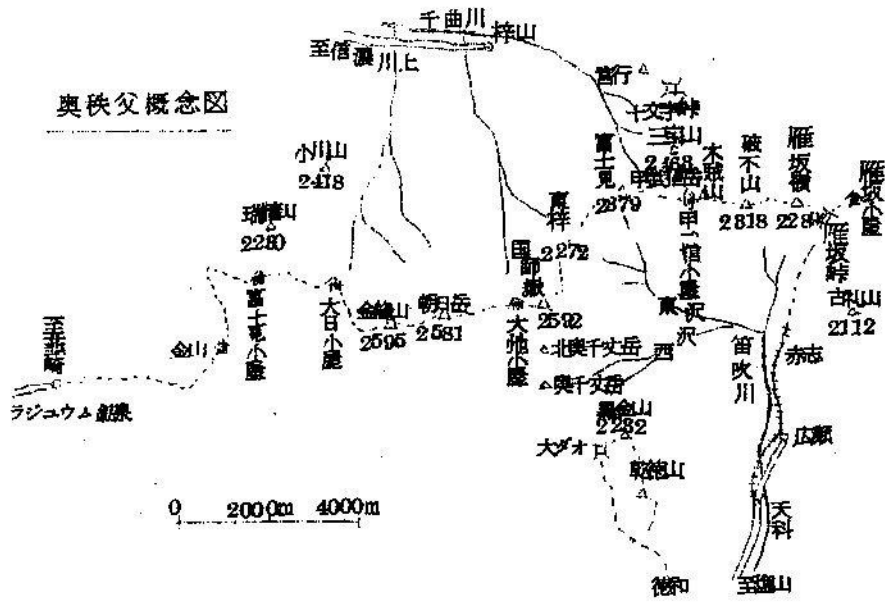
雨で地面がツルツルするし、トロツコの通るような木のレールが続く道は歩きにくかつた。先頭の速い足に夢中でついていくうち、この前スケートで痛めた足をギクツとやつてしまった。ひどく痛かつたので後の人達を待つているつもりだつた。けれどいつまでも来ないので、「そうだ四時半のバスに間に合う為急いでいるのだ。迷惑かけまい」とビツコを引いて歩き出した。前の人も後の人も見えず霧の山道は心細かつ

一四・五〇

五月五日

大弛小屋六・二〇、朝日岳七・四〇、金峰山九・〇〇、大日小屋一一・三〇、富士見一三・二五、金山小屋一四・三〇、増富一五・五〇

五月ゴールデン・ウィークに主として一年生強化合宿の為行われたこの縦走は、夏の合宿と共に悲惨な結果となつた。装備点検と準備会の不足で支障をきたした。第一日に残雪未だ尺余もある秩父の原生林に踏み込み道を違えたり、春山の雨の為テントの中で震えていたりして、ついに一年生は雁坂峠を通つて帰ることになつた。嘉納がこれにつき添つた。部創立以来少しづつ躍進を続ける部活動にあつて、私はこの時程如何に大勢の人間が全ての点で秩序ある活動を遂げることが難しいかを知つた。将来の部活動は、いつに統制と技術向上にあるとここに大いに警告しておく。



奥秩父概念図

縦走の後半は天候に恵まれ国立公園奥秩父としての大観を惜しみなく提供された。どこから見ても感動を覚え又見る場所により姿の微かな相異に気付く富士の峰。一つ一つ指さしても名を挙げてその山頂に思出のある南アの山々、遠くから北ア連山や八ヶ岳連峰、素晴らしい展望台である。目を近くにとめても、奥秩父の美しさはその樹木にあるといつも私は痛感する。美しき五月ともなると、落葉松の新芽やあの美しい遠く松の色も皆燃え始めてくる。名も挙げきれない程の針葉樹林にとりまかれたこの山程落ち着きを与えてくれる所は知らない。

四日の日は田上と二人大池に着いたけれども、小屋は寝るに狭しとばかり人が入つて、手足も伸げせない。仕方なく二人は小屋の傍で丸太を組んでオカン場を組む。うっかりと靴を放り出して寝たので、翌朝ヒモ迄凍りついた。味噌汁は凍り、味噌汁も盒の飯も全て凍りつき石をかむが如く味

気ない。

金峰山は信仰の山として有名である。南アからも八ヶ岳からも見える五丈岩はそのシンボルとして崇められている。ここからは御岳丹仙峽へも、増富温泉郷へも降りられる。金山は秋はアベツク連れのハイカー達にとつては手頃な所だろう。農家造りの唯一軒しかない有井館という宿屋があるきりで寂しいが、ここからは金峰、瑞牆、飯盛、木賊の山々が、大層近くに手にとるように見られる。

近くて手頃で危険の少ない山といえげまらず奥秩父の山々が挙げられ、親しまれる。雪はいつまでも根雪が残り四月中まで降っている。又奥秩父の里も淋しく寒気と戦いついては抜く人の姿と共に私の好きな所だ。つりさがつたトウモロコシの群と餌を漁るレグホン系の鶏もマキ小屋もワラ屋根もカチンカチンの畑も、皆春佐保畑の衣ずれの音に湧いているようだ。

積雪の奥秩父

嘉納秀明

- コースタイム
- 三月一八日 新宿二〇、三〇集合 二二三
 - 五五長野野行
 - 三月十九日 諏崎八・一五 増富一〇・
 - 〇〇 金山一二・三〇 食事 一三・五〇
 - 発、富士見平一五・一〇 富士見小屋一五
 - ・一五
 - 三月二〇日 富士見小屋七・〇〇 大日
 - 小屋八・〇〇 大日岩九・一〇 金峰手前
 - の岩陰食事一一・五〇 五丈岩一三・五〇
 - 朝日岳一六・三〇 大池小屋一八・三〇
- (泊)
- 三月二一日 大池小屋滞 快晴
 - 三月二二日 大池小屋六・〇〇 国師岳
 - 七・三〇 東梓一一・〇〇 水師一一・二
 - 〇、富士見一二・〇〇 水師一六・〇〇

甲武信岳一七・四〇 甲武信小屋一七・五〇(泊)

三月二三日 甲武信小屋 停滯

三月二四日、甲武信小屋七・三〇 木賊

山をまく鞍部八・一〇 破不山九・三〇

雁坂嶺一〇・五〇 雁坂小屋 一一・二〇

三月二五日 雁坂小屋一〇・〇〇 広瀬

十八日

今年の秩父は雪が深いと聞いて我々の心は弾んだ。一口がかりで食糧を買いあさり、新宿に夜八時集合。送りに蘆月が来、間もなく藤岡も立、加茂氏も現れた。新宿発十一時五十五分発長野行。ゆつくりゆつくりねむくなつた。

十九日

目を覚すと汽車は止つていた。駅名を見ると何と諺崎である。前の松本を起し座席の下にもぐり込んで寝ている田上を起した。靴は脱いであるし大荷物だ。仕方なしに穴山まで乗越す。穴山の駅で夜はしらじら

ゆ、十一時五十分より金峰五丈岩を登り、線上で食事、一時五十分五丈岩着行手の鉄山、朝日岳、国師岳がみえる。最近になつてこのコースを行くパーティはなく、ラッセルを覚悟していると石楠花新道を通り国師から独り来た人と逢う幸なり。八本アイゼンの僅かの跡をたどり鉄山からますます雪深し、常に膝までもぐる腰まで入つた時はザツクを降さねばならぬ。この機にクラストしていい雪ではピツケルよりストツクの方が遙かに良いと思う。ピツケルに身を寄せるとズブズブともぐり、身が傾いて重荷の故に倒れる事が度々あつた。ワカンの効果もふわふわした粉雪では余りないとは考へつけなかつた。歩がはかどらない、深雪のラッセルだ、日が暮れかゝる。私は道筋のさだかなうちに小屋につきたいと思ひあえぎ乍ら憩いだ。何度かの上り下りの後、私は下方の林の間に雪に埋もれかけた黒い屋根の端を見付けた、大池小屋だ。星が輝きはじめた薄明りの中を私は不道徳な奴

と明けた。北に八ヶ岳、西に駒ヶ岳、風三山が雪肌を朝空に輝かせた。駅の秤で重量を均一にしたが各自十貫位、上り一番で、蘆崎にもどり、バスに乗る。同行者十名位あり、増富ラジウム鉱泉で下車、十時出発、途中々バコを買おうとするや売切れ、喫わぬ私は知らん顔。田上、松本にがり切る。薄く雪のある道を黙々と行く。開けた茅戸の金山の小屋で食事する。金山峠に出、見はらしが良くなると瑞穂山の奇観が目にとび込んで来る。このまゝ庭に置きたいものだ」と横の人が云つた。私も賛成だつた。富士見の小屋には三時五十分到着。大日小屋に昨日十名の女のパーティが入つていたので本日はここで泊る。正面に八ヶ岳が見える。今日は天候に恵まれた。

二十日

朝気温零下十五度。晴。寝すごして小屋を六時五十分出発。大日小屋から雪が深くなりはじめる。大日岩小休止。風景よし、北岳、駒ヶ岳、中央アルプス、八ヶ岳等見

に鼻を燃されたこの小屋にたどり着いた。六時三十分だ。私は懐電を探すと今来た道をそれをふりかさしながら、連れの二人を遡えに行つた。今日は十二時間以上も歩いた。小屋の中の雪をかき出すと、明日はここに停滯ときめた。

二十一日

この深々した雪の中の小屋で我々三人だけの一日だつた。云いようのない好天気。ゴイグルをかけて小屋のまわりで憩う。薪を切つたり、雪をとかしたり、食事のあとには三人寝ころんで山の歌だ。小屋の廻りにはウサギの足跡が沢山あつた。水場は二メートルも雪を掘り下げ僅かな水を得た。三時頃から鳥居峠から沢伝いに十名位のパーティが入つて狭い小屋は賑わつた。

二十二日

小屋六時出発、夜半から天候は崩れた。小屋のまわりは濃霧にとざされていた。出発後間もなく吹雪となる国師の登りの霧氷は美しい。途中遭難隊もとつぷりと埋も

れている。頂上には七時半につく東洋をすぎ吹雪ますます烈しく視界が狭く、後の松本をふり返ると右顔面が赤くなつてゐる。私も吹きつけられて顔が痛い。その上少し気温が上つたのか、淡雪で服につくと割に早くとける。ぬれた服は凍つて又バリバリとなる。私は途中わずかな物論でポンチヨを着込んだ。後で二人が風邪で弱つたのに私が丈夫だつたのはこの為だと思ふ。食事の場所もなく、カンパンと氷砂糖をかじる。風が鳴るたびに大きな氷水がペラペラと落ちる。こんな時私はふといつも私の散歩道である、或る曲り角を思い浮べた。それは灰色のくもつた冬の日の様に華調だつた。富士見を十二時に通過した。吹雪は続いて何もみえなかつた。時々現われる冬期指導標の小さい赤い布が枝に結びつけられ凍りついてゐた。私から未来も過去も手のとどかない所に置かれた様だつた。あえいでいる私の脳裡には、先刻とちがつて、明るい海岸都市の日射しが浮んだ。私がその町

に住んでいたと云う二三日前の事さえ、今からは縁遠かつた。「生存の最大の悦びと収穫する秘密は危険に生きることだ」と云うニーチエの言葉も陳腐としか思えなかつた。水師四時通過、雪は少しおさまつたが風は変らなかつた。甲武信岳がやつとガスの間からぼんやり見え、岩場となつた。長いラツセルで私は疲れ、先頭を松本に譲つた。この登りは完全に烈風にさらされた。立ちどまつて風に耐えた。雲が切れて青空が少しみえはじめた。五時四十分甲武信岳登頂。十分で小屋についた。連休で十文字峠や雁坂峠から来た人達が今日の吹雪で小屋で停滞してゐた。

二十三日

昨日の悪戦苦闘で疲れ今日は停滞だ。晴れて他の人は雁坂の方へ帰つた。又私達三人の山小屋生活だ。この小屋は極上だ。設備は良い上に太い乾いた薪が小屋の中に沢山蓄えてある。ストーブの端に週刊雑誌やマンガが一箱分もあつて飽きない。雪をと

かした水はひどくまずい。大根の様なツララをとかして茶をつくる。快晴だ。風音ははげしいが、小屋の方のガラス越しから雪煙をながゆてゐると、何とも云えない山小屋の気分だ。田上と一緒に甲武信岳にのぼる。金峰から朝日岳、國師、富士見と苦労して歩いた縦走路が真近かに見える。十文字峠の方も、越ゆべき峰なる木賊も見える。田上の玩具の望遠鏡で上越の山々、淡間は煙をはき、眺望は欲しいまゝ。

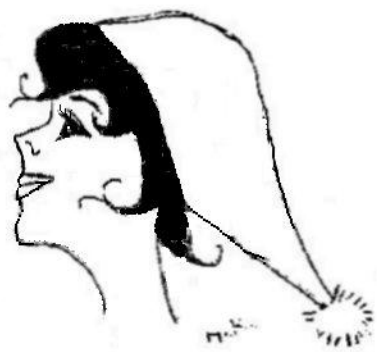
二十四日

昨日夕刻から風は止み、しんしんとして雪が降り続いた。木賊の北側をまいたため、雪の深く崩れやすい斜面を、足をとられながら歩かねげならなかつた。破不山の鞍部に出るとやゝ雪が硬くなつて歩がはかどる様になつた。田上は風邪がひどく、松本は頭が痛いと言ふ。私一人体の調子がよく、破不山の登りは気持よくさえあつた。破不山の下りあたりから、完全な春山の表面が溶けて再凍結したアイスバーンとなり、

南面の雪はずい分薄く時とすると熊笹が顔を出してゐた。雁坂嶺について時計をみる。と意外に早い時刻である歩きよい雪面の為夏時間と大して変らないと気がついた。雁坂峠から十分も降つて小屋に着く。誰も居ない、十二時だ。素裸になり、ラジウスを出して、着物を乾かす。三時頃笠取小屋から三名入る。笠取から先、笠取の方にはほとんど雪がないと云う。ストーブを囲んで話をしてみたら、一人は前私が住んでいた所のすぐ近くで遊び場の川や公園はまるつきり同じだつたし、他の一人は田上の家と百メートル位に住んでいる人であつた。

二十五日

田上の風邪は少々ひどく、口数も少なくなりだるい様子で、又三人の話で笠取の方は泥げかりと聞いて、雁坂から塩山に帰るとに似た。十時にゆつくり小屋を出ると雪はまだ降つてゐた。峠から下ること一時間もう雪はない。下では雨であつたのだ。家には十二時頃帰りついた。



ウウーン もつとワ……

佐藤 文雄

これは昨年我が都立で仕入れた言葉であるが、語源的には柳屋三龜松の「イヤーン ぼつかー」式のものである。そんなことはどうでもいふのだが、この言葉は私達の美的観念をズバリと言いつくしている。と言えないだろうか。なぜなら私達は、完全の美とか均衡の美などと同じ位に、いや或

だから男は（僕だけかも知れないが）、口紅をした女の人に、ちよつと素直に付いて行けないものである。この頃は皆が口紅をするので、どうか我慢もするが、付け眉も、アイ・シャドウもまでする人はやっぱり嫌いである。と言つても、この不完全な美しさは、野性美 といふのは少し違ひるのであるが、分つて載けるだろうか。

「美人ニ年ナシ」

さとうふみを 記

和洋菓子と食料品

富 士 見 家

TEL 雪の下岐れ道 二〇四八
大仏通り (鎌倉) 二〇二一
雪の下師範前 二〇一八

る時にはそれ以上に、不完全の美とか凄然とした美しさを好むからである。従つてこの「ウウーン もつとオ（完全に）」の言葉は、非常に美の感動を見つけた時に発せられるのではないだろうか。例えば、春の随月夜の美しさ、これなども日本人にしか解らない感覚であらう。土居光知によると、これは強気によるのだそうである。

いでや、上の品と思ふだに難げなる世を、と言は思すべし。白き御衣どものなよよかなるに、直衣ばかりを、しどけなく着なし給ひて、紐などもりも棄て、添ひ臥し給へる御火影、いとめでたく、女にて見奉らまほし。この御為には、上が上を廻り出でて、なほ飽くまじく見え給ふ。

皇太子の妃選考などではむろん違つて、御存知、源氏物語「雨夜の品定め」の一段である。

このだらしなさ、きどらなさに、私達はほのほのとした美しさを感じるのである。

伊豆の海岸線

鈴木直美

参加者

- 吉田、松本、望月、河野、小野、桑原
- 鈴木、堀内、柏木、磯崎、加藤、山上

11日	9:30	港出	沼津
	14:40	着	波勝
	15:00	発	"
	17:00	子浦	TS
12日	7:00	子浦出	発
	18:00	中	木
	14:30	石	郎 崎
	15:15	"	発バス
	19:30	伊東	発、電子

新しく国立公園に加えられた伊豆の西海岸とそのスカイラインを訪れたのは四月半ばで各地は花の宴にうかれて居る頃で、常春の園伊豆では道端の花々が「花の里」のおもかげをわずかにしのびせていた。森蔭には夏緑をつけて暖かな太陽のめぐみをすみずみまで受けて成長の段階に入りつつある頃であった。

沼津から船で出発する。伊豆の山々がすぐ海に面して海岸線を引いて居るし、田子の浦清水の金色の砂子の光が自から曲り流れて、長く海とをへだて、居る。波は春の海独特な柔の音の様な感じで、穏かに響いて来る。変化も乏しい晴天にすべり落ちそゆうな白雲に心も空に奪われそうである。西浦海岸にそう大小様々の入江に安住する漁港はやわらかい日をおびて輝いて居た。船上での五時間半もの長い間、新鮮な太陽の動きの下で、まれ人を迎えての静かな海の形なき水に浮んで、伊豆の山の色・形・情の変化をぼんやりと眺められる。

からである。船を降りたのが三時だから子浦に着くまでの二時間半は断崖と眼下の青い海、海ははてしなく南に向つて広がり、海岸線に沿った数々畑では、やわらかな太陽のめぐみを受けて、ヒナ菊や色とりどりの花さかりを、なだらかな丘陵に沿つてハイキングし、絵巻物の様に美しい風景が長く二時間半も続いて居る。その間、他のパステイには違わない。時折り花園に人影を見るだけである。

進むにつれて近づく夕暮は赤々として牡丹花の眠れる如くうつろうている。静かな山ぞい近くに水を求めてテントをはる。光は消えて日も暮れた。子浦の港は南伊豆とは又異つた様な漁村であり当地は霧も知らず、四季暖かで冬を知らぬ所だと云うだけにテントの一夜も寒くなかつた。

翌朝七時半に目的地に向つて出発した。妻良入間とその日はスカイラインを楽しんだ。それでもはるか下に海が青色に見えた。伊豆の山々では急な登りもあるし下りきつ

同じ年の夏に、西伊豆の堂ヶ島に遊んだ時は九月の波模様で、荒い波と潮のにおい、照りつける太陽と動かない巨岩とを黒金の軸先で眺めると不気味な感情になり、大海を我が物顔に占領して居る様な気分になつた。四日程情趣豊かな南園の雰囲気スケッチ出来たが、一周の予定では舟から機々の岩石の面白い形の島々を太陽の下に通る過ぎるだけだが楽しめる。海蝕岩石が穴を明けて海水を通して居るのも見える。こゝう云う所は伊勢海老の産地で、又その他の海の幸の産地でもあり伊豆の忘れ得ぬ旅情のひとつとなる。

いろいろ眺めて松崎まで行き、此処で小舟にのりかえ、磯の群り住む伊浜までの海岸線は、南伊豆の秘境と云われている波勝寺で海につき出た巨岩、そそり立つ岩石は潮騒高く寄せては、かえす波にさからい住んで居るのを示している。さながら雄大な溪谷下りである。深海の水底の富が宝石にもまして光つて見えたのは春ならではの水の色

て磯の香をふむ事も出来る。微風は足音をたてずに梢より梢に渡つて山の香をちらしている。木々をかきわけ込んだのも覚えて居る。石廊崎に到着するまでの七時間は長く思える。この間、おびしいながら、四季の自然の恵を受けて生活して居るかくれた美しい漁村が数々ある。

石廊崎は南伊豆の地の果て燈台は青一色の太平洋につき出た断崖の上に在り下方に入江を長くのぞむ事が出来る。何かささいこまれる様な海でこゝ辺は大分俗化が気になる所である。

先端より東伊豆はバスで三時から伊東着の七時迄の間、上田、白浜を通り過ぎる。たえず大島の水平線上に呼び出て心楽しくなる。風景はすばらしく美しい。

下田、白浜、今井浜は海岸線に沿つて居るが熱川、伊東までは温泉地ではあるが、海岸美はのぞめないが、夜道なので問題は無い。伊東発七時三十分の東京行に乗った。

烏帽子——槍縦走記

河野 哲

十四日

新宿発一五・二〇 松本着二三・四〇

原で泊

十五日

松本発五・〇八 七倉着七・二〇 八・

〇〇 出発 濁小屋九・五〇 T・S 二〇・

〇〇

十六日

T・S 一〇・二五発 三ツ岳一二・二〇

野口五郎一六・三〇 五郎池T・S 一七

・四五

十七日

T・S 八・二〇発 稜線八・五〇 東沢

東越一〇・一〇 鷲羽岳一三・四〇 三股

連華小屋一四・五〇 双子池T・S 一七・

四五

十八日

T・S 七・三〇発 横沢岳八・一五 槍

ヶ岳一三・四〇 殺生小屋一四・四五 槍

沢小屋一六・二五 一設小屋一七・二五

横尾T・S 一八・〇〇

十九日

徳沢園一一・二〇 カツバ橋一二・三〇

上高地発一四・〇〇 (バス) 松本駅(泊)

二十日

新宿駅一三・二五

ムムバー リーダー 田上栄一、松本正雄、

鎌月元雄、河野哲、石黒 康

縦走記というと、「何時何分〇〇番」というような記録を主体にすることにそれらわれ易い。そのような記録は決しておろそかにすることは出来ないし、僕自身この縦走の時には克明にタイムをとつて、帰つてきから二日ばかりでまとめておいた。しかしこゝには、到着時間や起床時間に囚われない、北アルプスの思い出を話してみよう。柄にもないセンチメンタリズムをふりまわすのではないが、そのころ僕は全く怠惰な毎日を送つていた。春以来のことである。授業に出るのは徳怯、読むものといつたら、エラリー・クイーンとか、クリステイというよりな頭脳遊戯に過ぎないものばかりであつた。夏休みに入つても何ら生活態度の変化はなかつた。義務であるテニスの練習もしげしげ休んだ。せじつめれば「情熱」の欠如である。こんな状態のまま七月の八ヶ岳縦走に参加した。二十三人の大キャラバンが、葦科山を敗走した時の思い出は、登りの苦勞と共に忘れることが出来な

いが、それだけに下山の間、また帰つてきからの無念さ、口惜しさは、計画が素晴らしい故もあつて、尚更であつた。自然、僕の関心は次の計画に向けられた。はじめのうちにはもう一度八ヶ岳に、と考へた。しかし計画が變つて、北アルプスと決つたとき、それを妨げるべき何物も僕にはなかつた。行けさえずれば何処でも良いときえ思つた。それはある意味で、試験に失敗して氣力を失つた学生が、単位さえとれれば、とあきらめる心にも似ていた。単に八ヶ岳から追い返されたが故のものではなく、数ヶ月にわたつて積つた無氣力さと怠惰とを追い払いたいたためでもあつたようである。

八月十五日、松本から大糸南線の始発で信濃大町へ、大町からバスで七倉へ。七倉で朝食をとる。森林軌道に沿つて約六軒、濁り沢の出合いである。こゝから北ア最初の関門である烏帽子岳の登りにかゝる。田上、鎌月、松本、石黒と僕の五人。良い天

気があつた。しばらくは濁り沢に沿つて進む。ところが、一時間と進まないうちに田上が進めないと云いだした。顔色が悪い。だるいと言う。四十分ほどで水場とまいたので、そこで大休止して昼食ということになり、とにかくも水のあるところまで行きつく。リーダーなので皆心配したが、ゆつくり休んで食事をついたら顔色も良くなつた。ヤ、軽い石黒のザツクととりかえて一足先に田上は出発。残る四人も間もなく後を追う。この小事件は、かえつてそれから先五日間の五人の団結を強める結果になつた。山では日の落ちるのが早い。風が出はじめる。烏帽子の尾根に出た時は七時を過ぎていた。いそいで今宵の宿を見つけおげならない。少し下つたところにテントの灯らしいものを二つほど見つけたが、日は既に暮れて降りる道もわからぬ。大声で呼びたて、道を教えてもらう。ぼんやりといれば吹きとげされそうな風である。ほうほうのいで逃げおける。テントを張り、パンを

ぼそぼそかじつて寝てしまふ。この日はほとんど登りつゞけの一日であつた。

八月十六日、大変なところへビバークしたものであつた。一応テントサイトであるし、水場はあるとはいえ、たまり水でおそろしく汚ない。手ぬぐいで何度もちして煮立てて使う。それでもないよりまし。ゆつくり朝食をする。今日は五郎池までと決めたので少しはのんびり出来るわけだ。

野口五郎池は、いくつかのピークを持つていてほとんど岩と砂げかりの年期の入つた山であるが、どことなくおゝらかで僕には気に入つた。名前もふさわしい。たゞし隙限のない登り下りにはおそれいつた。快晴——素直な山日和である。表銀座が見える。槍ヶ岳はまだまだ遠い。午後四時近く、五郎池が右下にあらわれる。一番楽な降り道を探したがやはり難渋した。開けば、もうひとつ巻いたピークのとこに最も降り易いルートがあるとのこと。道松の間のガレを抜けて約一時間、山あいのお静かな池で

ある。烏帽子から大事に持つてきた貴重な汚水とも別れる。

八月十七日、四時起床と決めておいたのに眼が覚めて時計を見たら六時であつた。皆ぐつすり眠つたらしい。今度は寝床までのぼるのに三十分とかからぬ。最短コースを選んだわけだ。コースは、赤岳、鷲羽岳、三俣連華岳、双六池の順である。右手に薬師、赤牛がよく見える。ガスの晴れ間には、饑鬼、燕、大天井岳などの、いわゆる北アルプス表銀座の景観が素晴らしい。槍ヶ岳が時折雲の切れ目から顔を出す。流石に群を抜いてそびえるという感じ。松本が盛んに嘆息をもらす。

鷲羽岳の登りは急で長い。田上が少し遅れる。頂上で蜜柑の罐詰を開ける。晴れていればこの頂上からの眺めが最も素晴らしいとか。残念なことには丁度ガスが強くなり出して陽もかげつてきた。展望はまかたかつたとはいえ、鷲羽岳は壮快言葉を絶する峻険であつた。

八月十八日、いよいよ槍ヶ岳に挑む日である。五人それぞれに入念なパッキングをする。双六池をあとにして先づ樺沢岳を越える。尾根を二つ三つ歩いていこうち、ひどく気温が下つてきた。風が下から猛烈に吹きあげて霧が上へ上へと流れる。ザツクにつけてあつたうちわが飛んですぐに見えなくなつてしまつた。既に槍ヶ岳にかゝつている。追い風も幸して、それほど苦しくない。急勾配の登りをつめて約二時間、肩の小屋に出る。岩壁に風をよけて震えながら昼食をとる。ザツクをおいて頂上へ。往復一時間の岩登りである。頂上は思ったほどせまくない。視界ゼロ。互に握手を交し、煙草をまわし、写真を撮つて直ぐおける。

名にし負う槍沢の下りである。岩とガレを踏ぶようにしてかけおける。少しも疲れないのは不思議だつた。次第に晴れ間が見えてくる。槍沢は既に雪溪も過ぎて、川の上流となつていゝ。空の色をこれほどまで深く写しとつた水を僕は、川の他に思い

出せない。岩をかんでほとげしる水、滑るが如く走る水、空の碧、淵の緑、白い岩、光、影。都会には無い水であった。山でなければ見られぬ清さであった。

八月十九日、明け方シートの下を水が流れているのに驚いて眼を覚ます。雨が降っていた。川の中程の大きな砂州にテントを張つたので雨に降られてはひとたまりもない。

川に沿つて上高地へくだる。道幅は広い。元さん松本と三人並んでものすごいスピードで歩く。十均時速六軒。つまり一軒を十分で歩いたわけである。それにしても、元さんなど七頁以上の荷物を背負つてよくあれだけの距離を走るが如く歩いたものである。ワングルがその本領を発揮したベリスであった。

上高地はまさに俗界であった。自動車もあつたし、サツクドレスもあつた。元さんが絵葉書を買つてきて、こそこそと何やら書いてある。そのうちの一枚を失敬して僕

も真似をする。ほとんど会う人もいない山の中でよりも、ありあまるほどの人間の居る中で、妙に人恋しくなるのは不思議といえげ不思議なことであつた。それはまた。僕達が、煩しきこと多き俗世間に再び戻つてきたことを意味するものであつた。

月賦の店

日本信販加盟店

ショップサービス加盟店

株式会社

レッツサンカメラ商会

横浜市中区伊勢佐木町一ノ三五

松屋デパート前

北海道てんとあるき

松本 正雄

七月二十四日 上野発 (東北本線經由)

一五日 函館、大沼公園 (泊)

一六日 小樽、札幌 (泊)

一七日 旭川、天人峽 (泊)

一八日 大雪山、旭岳、姿見池岩上

一九日 強風ミソレの為停滞

二〇日 北鎮岳を経て黒岳岩室 (泊)

二一日 層雲峡、旭川より夜行

二二日 網走、北浜原生花園、洞フ

ツ湖、河津湖 (泊)

二三日 弟子屈、鑑別温泉 (泊)

二四日 摩周湖、屈斜路湖和琴、砂

湯温泉 (泊)

二五日 川湯、帯広夜行

二六日 苫小牧、支笏湖 モーラップ

二七日 札幌、帯広、日高海岸 エ
リモ峠 登別温泉
二八日 函館
二九日 上野着 (奥羽本線經由)

北海道という地名は、私達に何かエキゾチックな感を抱かすものが多い。内地とはスケールの点で異なる大自然の姿、日本人の祖先と云われるアイヌ民族とその風習等、殊更我々に魅力を感じさせるのであろう。夏季休暇を利用し、テント・寝袋・ラジウス等、衣食住を一度にリュックにおさめて、友と二人で豊富な観光資源を尋ねつゝ人の情に触れ、旅愁を味おうと、七月中旬に、二〇日間に亘る旅に出る。

今夏は正に空前の北海道ブームである。慌しい乗船の喧嘩から開放されて、出港した青函連絡船が、もの悲しい汽笛を鳴らし、船旅程旅にある人を淋しくさせるものはないと感じながら、島影一つない海原から船室に入ると、内地からの旅行者で一杯で

ある。然し旅館泊りでない二人には、旅中一向に苦にならずに済んだ。

ヤがて音五稜郭の要塞で、如何にも軍港と思われる程、絶壁の多い函館港に入る。ハマと同じく開港百年祭に湧き返つた町からは、馬糞風と云われる異様な臭気をもつ、生暖かい空気が、駅の構内に迄、匂いへいこうするが、良くいえげそこに大陸的、甜気があるともいえよう。ここは往復共に、素通りしてしまふ。

渡島第一夜を函館から一時間の大沼公園で明かす。全く水彩でさらりと描いた絵ともいうべき秀麗な駒ヶ岳を背景に、大小数百の小島を浮べた大沼・小沼の池に、二人はボートを借り切り、スケッチ・写真・ポイントで湖上散歩に出て、月を眺めて湖水の水で、お茶を汲んだりなどして、キャンブを楽しみ、長途千軒余の旅の疲れをいやす。もう一ヶ月も早いと、あの香り高いスマランの花にお目にかゝれるのにと、一寸口惜しい。

木造で、ぐすぶつていた。翌朝北海道という羽衣の薄に寄り、午後は大雪山の主峰旭岳(二二九〇米)のふもと、姿見の池につく。ここには、無人の岩窟があり池は鏡の如く澄んでいるというが、半分近く凍つたまゝで、あの水の冷たいこと、北アルプスの山上以上である。周田の山々には、険しい高山などは見られないが、北海道の屋根と云われている様に二千級の山々が、一大火山群を為して、山頂附近には残雪をもち、雪溪がそこそこ輝き、その間には、緑のヘニ松、花畑が交錯した素晴らしい山岳公園である。冬はスキー登山でにぎわうスキーヤーにもあこがれの地でもある。池のずつと向うには、無気味にうなる地獄焼の硫黄の煙が、あちこちの穴から吹き出ている。周田の雪田を黄色く染めている。二人は、もう北海道の丁度中央辺りの山中に居るのだ。翌朝早く旭岳頂上へ向かう。台風の前兆の為か、天候はくずれ始めて、風雨激しくてみぞれ降る中を、やつと登頂

札幌という町は、駅員のナマリが強い。

サツボロと連呼する声に、強く北國の町のもつわびしさを感ぜさせる反面、町全体が、第一印象でもつて、気品を感じさせる。市民広場・時計台・アカシヤ並木。どれも明治以来の真新しい伝統の姿が、如実に示されている。区劃整理された町中を遺逸し、本場のビールに酔い、詩を吟じながら並木を歩ける北大の学生が羨しく思える程詩的な町である。渡島中三度に亘り、訪ね町並を歩いたのは、ここだけである。電車通りの近くの北大構内と思われる原っぱで、夜晩くテントを組みたて、星空を眺めて寝袋にもぐりこむ。

早朝四時頃、パトロール中の警官に不審尋問を喰つたりした思い出深い町でもあった。町を後にして、一路二人は大雪山縦走へと足を運ぶ。ヤがて着いた旭川の駅は、開拓以来のもので、冬はカンカンと燃え続けているのであろう大きなストーブを構内にかゝえて、建物全体が、旧式な外観をもつ

したが、視界は何も見えない。朝九時頃には、東からぐいつと霧が晴れていけば、北海道全部が見渡せるといふが、致し方なく二人は、縦走をやり直す為、小屋へ戻り半日、北大の学生と談じる。(後日その人と、松本駅で逢い、互に驚いた次第)崩れると一週間も続くという天候に、コースを変えて、昨日登った旭岳を横着きにして、縦走を翌朝未明に行う。数軒も続く大雪溪の連続を踏みしめて歩く。殆んど人も通らずトラックも見分けられ難い道を歩いている内に、いつのまにか雪上の獣道に踏み入り、大きな熊の足跡を見つけて、肝をつぶしたりする。七月下旬頃は、山から降りる熊が多く、又この熊は本土の熊と異なり、人に飛びついて来る習性をもっていると聞いていたので、ヒヤリとした。又暫く行くと、北海道だけにしか居ず、天然記念物指定のナキ兎が、かん木の繁みから顔を出しているのに出会う。ねずみ程の大きさの兎で、クイーンクイーンと泣く声が、雪溪

上の繁みから聞えてきて、雪中にしげらぐたすずんでしまう。
広さと美しさに於いて、アルプス以上というお花畑にも出合う。色とりどりの高山植物が、一面に広がり残雪に輝いたさまは素晴らしい。かくしてともかくも、濃霧とみぞれと風速十米と思われる風に悩まされ乍らも、縦走を完成する。後日十勝―大雪縦走を期し、層雲峡に到着。

夜行の寝ぼけ眼で、北国中の北国網走に着く。越冬隊訓練地トウフツ湖と北浜原生花園に遊ぶ。丘に登れば、遠くかすむ知床・花咲の両半島が望め、眼前には潮の匂いの強い風に、打ち寄せられたオホーツク海の荒波を、眺めながら、湖水際で放牧された牛・馬と記念撮影する。ここでは、七月も終ろうというのに、夜がまだ青々として、穂が出たばかりで、セーターを着ていても何も寒くない。町そのものは、北国の寒村という程で、ひどく活気がなく、然し又落ちついた感じの町である。刑務所以外は

翌日快晴な天気恵まれて、摩周湖へ行く。アイヌ民族から神の湖など呼ばれ、周囲二〇〇米もの高さの黒い岩の絶壁。その上を這う暗緑色の樹海、全くじーんとすいこまれるような深いあい色の水、湖水に小豆粒のように浮んでいるようにしか思われない神の島、これら全体のもつ雰囲気も加え、アイヌの悲しくも雄々しい伝説と共に、私は一瞬ぐーつと胸に迫る感じを受ける。絶壁の上から遙かに湖水を眺めるだけで、湖水上には、ボート一つ見えない。一体に湖は、年中霧深く、水面は殆んど見えないのが普通という。昔長者が見物に来て、三日通い続けても水面を見ることができず、摩周湖や、百万石もさじを投げ、と詠んで帰った話もあり、私達は全く幸運だった。入る処も出る処もないのに、一年中水量が変らないという湖の神秘さと湖水の透明度世界一という水の色の余りに、人をひきつける力があるので、私はついここで大失敗をしてしまった。バスの休憩時を狙って

さして有名な処もない。

阿寒は、日本最北の国立公園で、大原始林地帯に包まれた中に、マリモで有名な阿寒湖・アイヌメノコの悲しい伝説を秘めた神祕の湖・摩周湖・雄雌阿寒岳などを抱いている。恋が容れられない為に、アイヌメノコが恋する人と共に湖底に、小船双共沈んでマリモとなつて結ばれた姿として、悲恋の一夜を飾る伝説を伝えた阿寒湖と夫婦喧嘩の末今尚怒つて噴火する雌阿寒岳を、霧雨煙る湖から眺めると、周囲の景色に圧され、ロマンチックになつてしまう。アイヌ人は、集落をなして道内各地に住んでいるが、和人と同化されてしまつて容ぼうでは、見分けがつかないといわれているが、アイヌ博物館のメノコなどは、圧倒されるような目鼻立ちである。

湖を後に四二軒、山又山をぬつて、七〇七曲り、バスの周囲には、エゾ松・トド松を始め針葉樹林や白樺・ヤマウルシなどを交えた見事な密林群を抜けて、弟子屈へ出る。

、二〇〇米の岩壁を下つてしまったのである。漸く苦心の末、湖面にたどりつき、顔を洗つてみると、昨夕湖水際にテントを張り泊つていた人とぶつかり、あいさつもそこそこに又がけを登り始めた。上りつめて見ると、バスの休憩時は、とつくに過ぎ去り、もう少しで私一人で人里離れた神の湖においてけぼりを喰う処だったのだ。皆に詫びたが、私にはもうあの水の感触や味は、生涯忘れられないものとなつてしまつていた。

さいはての町釧路は、阿寒から列車で、電柱と道路と原野以外に何も見えない中を進んでいく内に、ふつと現われてきた町、それが釧路である。根室と共に並び称せられる霧の町である。午後ともなると、太平洋側から包んでくる霧の為に、ほんの今迄見えていた建物・人間・通りなど一際うすぼんやりとし、その内見えなくなつてしまふ。啄木の釧路時代の確の立つ知人岬から釧路港を眺めている内に、港内の船が見え

つかくれつすると思うまでもなく一寸先も見えなくなつてしまい、ひんやりと肌に沁みこむ霧で、少し衣類がしめつぽくなる。その霧のかゝる合間に、規則正しく鳴るポーツという響音が、わびしい北国の漁港にひびきわたたり、又哀れである。二人が、岸から降りてきて、とあるまんじゅう屋で、五〇年前の御路を知る二人の老翁に逢い、話をきく。一面原野で、港だけを生活の資とした漁村のこの町は、さいはての駅でもあつて、非常な霧がかゝり、往還を歩いていても、鈴を鳴らして通る馬車にぶつかつたり、電柱に頭をうつつたり、衣服が濡らぬように、傘をさして歩いたり、大変なものであつたらしい。北国訛りの強いこの老翁達の話も尽きる処を知らなかつたが、不運となつた根室本線も開通したので、別れを告げる。

日高海岸は又美しい漁村の村落が海岸線辺りに続き、岸辺いに黄金を敷きつめる程費用のかゝつたという黄金道路が、続いて

金もうけの話

佐藤 文雄

去年の大学祭のことでした。私達が喫茶店モンブランを営営しましたのは、当時のワッゲルは「金欠病」にかゝつて、その顔色やマツ赤つか。帳尻はいつも赤げかりでした。よし、こゝらで一ツ「もうけてやるか」と、大学祭も始まる三日前、急に動き出したのでした。

幸い私達の熱心が八幡大菩薩に聞き入れられましたのか、大願成就、場所もよし、椅子・テーブルもよし、の一階ホールが開業場所と決定いたしました。

皆の努力が突つて明日が開業という、その喜びも束の間で、蓋から棒に「使用まかりならぬ」とのきついお達し。

ホトホト弱りましたが、「なにくそ」と、また頑張りの仕直して、部員徹夜で準備

いる。海中にたゞよつてくるコンブを、クマデ機のもので、引き揚げ干したり、又一寸とした数トン位の小船で漁をして生活している貧しい漁民達の生活が、そここにバスの窓から見られる。奇岩が打ち続く海岸地帯の景色よりも、彼らの生活の方が、私の興味をひくものが多かつた。

紙数も僅かなので、まだ長万部のケガニのこと、弟子屈の温泉宿で色白の北国の乙女から貰つた黒ユリの球根のこと、湖水際の砂浜を掘ると温泉が出る阿寒の砂湯温泉のこと、登別温泉の混浴の大浴場のこと、小樽・札幌の北海道大博覧会のこと、支笏・洞爺湖のことなど書き尽せないが、又の機会にゆずる。北海道は、まだまだ所謂観光地以外に私にはひきつけるものが多い。雪で埋もれた北海道も又良いものであろう。まだ交通機関も殆んど発達してはず、学術探険隊が出かける知床半島や北の渚札文・利尻島などが、私をひきつけてやまない。私達のテント旅行も足の向くまゝ無計画で何時か又歩き廻る事である。

を完了いたしました。

その他諸々の苦勞もありましたが、皆さん良くやつてくれましたので、ともかく部の病気を治しました。

それでは金もうけになつたのかと申しますと、そうとげかりは言ひ切れませぬ。

授業料をコーヒー代にしてしまう人も少くないだらうと思ひますが、それでいてどの位買いでいるかと申しますと、そう大した額ではないと初めて、気が付いた次第です。ですから、一ト月や二ヶ月の間毎日喫茶店通いをしたから、といつてウエイトレスを誘惑するのは、まだ早すぎる。と申せましよう。もつとも、それもこれもあなたの顔次第ではあります。と申しますのも、コーヒー一ポンド七百円として、五十杯とつて一杯当り十四円、砂糖三円、クリーム五円、計二十二円は、純粋にあなただの胃の中に入つてしまいます。その他ガス・水道・電気代・店舗を始めとする大道具・小道具の原価償却費、レコード・食

器等の消耗品費、こうした経費の中でも最もかかるのが看板娘代（人件費）、それに税金。

こう見てくると、私達のモンブランは決して金もうけにならなかつたと申せましょう。それでも一応の黒字が計上できましたのは、労働者（部員）の無報酬によるものであり、これこそ前近代的な経営の仕方でした。今度は部員も去年と同様の献身努力はしますが、それをもつと合理化をして、苦勞をできるだけ軽くするつもりです。その上、最新の経営方法を取り入れて、コストの値下げ等、小さいながらも経営というものを実際に学びたいと思つていきます。

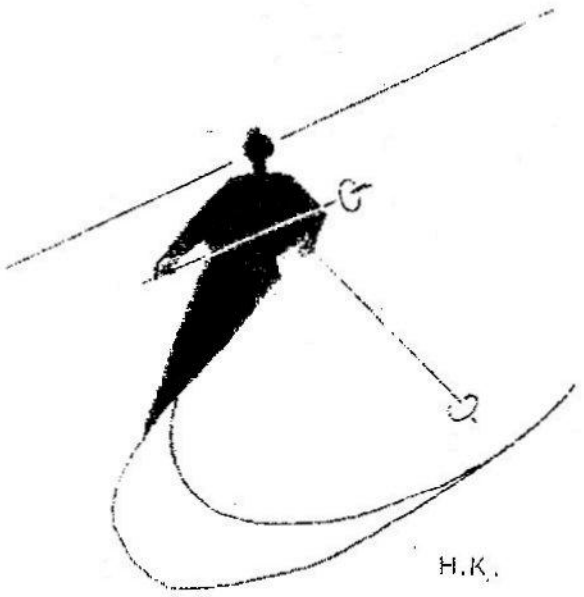
金もうけの苦勞を、モンブランを通じて述べるつもりでしたがこんな文になつてしまい、誠に申し訳ございません。モンブランはあなたのものです。まだ生れたての赤ん坊ですから、可愛がつて育てて下さいませ。

それではまた、モンブランで遊ばせよう。

スキー合宿報告

（望月記）

三月五日から五日間、燕温泉で第一回スキー合宿を行った。参加者は十六名、それに横浜広田スキークラブから少数が加わった。今回は理科大学スキー同好会と合同し、指導員はアルペンスキークラブの山辺先生、燕の全日本指導員の宮沢先生その他の多数の方にお願ひした。練習、映写会、懇談会など多様な催しをして、和気あいあい



H.K.

のうちに理科大学との交歓を行い、最終日の十日に成果をみるためパツヂテストを行い好成績を残した。帰りに一年の岩上が骨折してしまひ、無事故で幕を閉じることの出来なかつたことは残念である。

パツヂテスト合格者は次の通り

- 二級 河野智、望月元雄
- 三級 堀内隆
- 四級 田上栄一、岩上克尚、吉野大次郎
- 五級 荻野高子、氏平裕子、鈴木亘

柏木寛、大串兎紀夫
リーダー 田上栄一

料理旅館

博 雅

鎌倉八幡前 (電) 鎌倉0076

ワンダー・フオーゲル部 収支計算書

自昭和33年4月1日至昭和34年3月31日

収 入 金 額	支 出 金 額
部 費 16,350 円	山 岳 道 具 購 入 9,080 円
コ ン バ 代 剩 余 金 100	案 内 書 ・ 地 図 555
喫 茶 店 ・ コ ン バ ラ ン 純 利 益 4,102	テ ン ト 4,200
雑 収 入 29	大 ナ ベ 470
	山 ナ タ 450
	布 ベ ケ ッ ツ 580
	呼 子 175
	ラ ジ ョ ス 2,700
	諸 料 金 508
	消 耗 品 費 202
	雑 費 100
	交 通 費 270
	雑 誌 ス カ イ ラ イ ン 印 刷 費 等 3,461
	ワ ン ゲ ル マ ー ク 補 助 分 1,130
	登 山 補 助 金 1,345
	次 年 度 繰 越 4,490
20,581	20,581

34年度ワンゲル役員

主 将	田 上 栄 一	経 三 年
副 主 将	嘉 納 秀 明	工 〃
企 画	岩 上 克 尚	学 二 年
〃	望 月 元 雄	経 三 年
〃	松 本 正 雄	〃 〃
〃	吉 田 光 志	〃 〃
〃	宮 内 幹 夫	工 二 年
〃	藤 岡 輝 生	〃 三 年
〃	深 谷 陽 子	学 二 年
会 計	佐 藤 文 雄	経 三 年
編 集 部	嘉 納 秀 明	工 〃

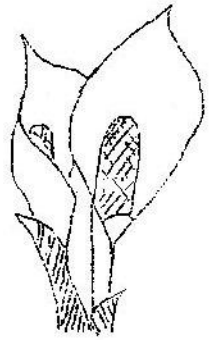
立野の一年は役員をこの他に定める

山行その他

◎◎◎ 原 稿 募 集 ◎◎◎

締切り 九月十五日

送り先 経済学部部室



編集後記

☆当初の四月十五日発行の予定が遅れた理由は、編集部の不手際もあるが、原稿を頼んだ人達が期日通りに書いて呉れなかつたことが大きな原因である。

特に三年生の諸君に反省を促したい。

☆山行の中には随分大変なのが多かつた。時間と場所も示さず、まるでお伽話の様な願字も多いので博学ぞろいの編集部はケチのつけ通しだ。

ことであろう。

☆ワングルで盛んなのが麻雀である。殊に立野では部屋でつまむ者さえある。あの位勉学に精出せば十分なものだがねえ。

☆今年度の活動計画は未だ総会を経ないの
で本号には載せられなかつた。企画部では
現在山君を中心に佐渡ヶ島一周、立山剣
穂高縦走、スキ、ツアードなど計画中で、
創設三年を迎えますます発展し将来の基
礎固めが行われることであろう。

☆山には強いが、女に弱い部員もかなり居
るせい、ワングルの女子部員は積極性に
欠け、ともすると男性によりかゝる。とし
どしと部活動の中心に加わり、堂々と意見を
述べ山にも強くなつて貰いたいものだ。

☆次号は九月に小冊子風なのを発行する予
定である。三学期を結ぶべきなとしての使

☆もう一つ、編集部の弱体があり、数名の
人間が広告、編集、原稿取り、印刷、校正
と全てにテナテコ舞をしている現状にある
。今春は新一年生を迎え、新進気鋭の意欲
ある人達を加えて、後顧なくバトンを渡し
ていきたいと思う。

☆硬いことはこの位にしてと、桜の花が眼
の外で散つていると、云いたくもなる。

☆経済の食堂で金がないので編集部の男連
三人、ラジウスをもち出して、おじやを作
つて、食いながらの編集。二日間も朝から
晩までなので、食堂のおばさんが「よく飽
きないわねえ」と笑ふ。ささやかな青春で
ある。

☆はらはらと桜の散るや昼下り 松菊
窓の外の桜は折からの風でまるで雪の様に
降りしきる。今年は立野の清水ヶ丘移行に
よりまさしく時ならず丘は花ざかりとなる

命は大きく、年に数回発行する積りでいる
ひとえに部員諸君の協力を願う次第。

☆最後に。今回も報告文的な紀行文ばかり
になつてしまつた。次号は山岳気象講座を
計画しているが、この他にも、部員諸君の
広い内容をもつた「平素考えていること、
或は文学的香り高きことぐさまで」寄稿を
お願いしたいと切望している。

S K Y L I N E 二巻一号

印刷 昭和三十四年五月二十日

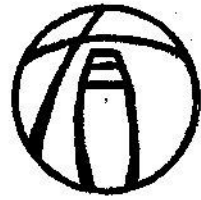
発行 昭和三十四年五月二十三日

編集責任者 嘉納 秀明

発行所 横浜国立大学ワンダーフォーゲル

印刷所 鈴木タイプ印刷 電話(三)六〇八九番

BOOKS & STATIONERY



横浜 伊勢佐木町

TEL (8) 014155

必ず郵券を
ご利用下さい

有隣堂

明かるい売場は
楽しい舗道

兎

イセザキ町

野澤屋

登山に・ハイキングに……新しい時代の新し



旗印



↓美味しい佃煮

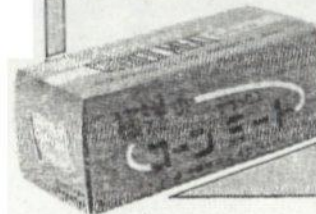
↑最高



¥40.

新発売

↓コーンビーフに代る



¥50.

クレハロンの優秀性・シールの完全と充分なるを
いまって、保存期間が長く数ヶ月間は保証されてお
したかつて登山やハイキングに携帯に便であり好適
です。しかも、価格が低廉であり、そのままでも物
味ですし、調理して佃煮とするなど、必ず御満足
けるものと自信をもっておすすめ致します。

東京極洋捕鯨